

講義の風景

総合政策研究科

モジュタバ・サドリア 教授

デーヴィッド・イーウィック 教授

「総合政策フォーラム I」 [火曜日/理工3号館]

エジプト、オランダ、ケニヤ、ノルウェー……。ずらりと駐日大使・公使が並ぶ。地域も東アジア、南アジア、西アジア、ヨーロッパ、中東、アフリカにわたるラインアップである。ちよつと例のない、豪華なりレー講義だろう。

イーウィック教授は講義全体のコンセプトについて、「幅広い経験と知識、そして国際理解を持った各国大使の視点を通して、学生らに、『国際社会における日本の役割』の、より深くきめ細かな理解をもつてほしい」と語る。また、こうもつけ加えた。「日本の学生は、これといって親近感を抱く国というものがないの

です。自国日本と、アメリカ以外は」。耳の痛い指摘だ。

世界は、日本をどう見ているか

11カ国駐日大使が連続講義

世界は、日本をどう見ているか……。それを知る得難い機会と思ひ、聴講した。

「国際社会における日本」をテーマに、4月19日から7月5日まで、毎週火曜日に連続して行われている（別表参照）。すべて英語による講義である。

特別聴講—メキシコ大使のみずみずしい日本観

聴講したのは、5月17日——講師

は、ミゲール・ルイス・カバーニャスは、イスキエルド駐日メキシコ大使。日本滞在10カ月目を迎えたばかりだそう。大使はみずみずしい日本観を、ユーモアを交えて語った。

日本人メキシコ移住、最近では多くの日本企業の進出を通じて交流が深まっている。そして興味深いモンゴリアン・スポーツ秘話。なんだかぐつと親しみがわいてくる。

アストロ・ボーイ大好き

日本が、メキシコ、あるいはラテン・アメリカの国々に与えた印象とは……。大使はいくつかの「驚き」

を挙げた。まず、第二次世界大戦後60年で、「天然資源を持たないこの小さな国が」これほどまでに国を復興させ、経済超大国になったこと。

同様に「国民の識字率、平均寿命、平均所得が高く、社会全体が総合して豊かなこと」。続けて、世界でももっとも強い経済的な影響力が日本にある、と語った。

「ソニーやトヨタといった企業だけではない。日本の映画、ゲーム、ファッションそれにアニメといった文化面の世界への影響はものすごいですよ。ラテン・アメリカだけじゃ



身ぶり手ぶりで講義する
カバーニャス・メキシコ大使

なかなかなかでない。……大

観が似ていて
突飛な意見が

論である。
「みな価値

「均質社会」
摘したのは、

一つは」と指
話しましょう。

て感じたこと
をいくつかお

「次に、わたしが日本に来て改め

「たとえば、85年マゲニチュード

も挙げた。
資分野における日本の資源の豊富さ

人的資源、テクノロジ、金融、投

大使。ラテンの陽気さで、全体の空

ら！ 本当に！」

響がある。そう、わたしだって、ア

ない、世界のどの国にでも日本の影

日本の均質社会、年功序列：

とても評価されているようだ。

重ねて、日本の貢献はメキシコでも

プロジェクトを組み、技術・資金面での

メキシコに援助をしてくれましたし、

8の大地震がメキシコを襲いました。

なかなかなかでないと思いません。でもこれは日本の
発展にとって障害になりかねないの

「日本では40代で大使になるなん
て考えられないでしょう。社会でも

「日本では40代で大使になるなん
て考えられないでしょう。社会でも

「日本では40代で大使になるなん
て考えられないでしょう。社会でも

「日本では40代で大使になるなん
て考えられないでしょう。社会でも

「日本では40代で大使になるなん
て考えられないでしょう。社会でも

「日本では40代で大使になるなん
て考えられないでしょう。社会でも

「日本では40代で大使になるなん
て考えられないでしょう。社会でも

「日本では40代で大使になるなん
て考えられないでしょう。社会でも

「日本では40代で大使になるなん
て考えられないでしょう。社会でも

「日本では40代で大使になるなん
て考えられないでしょう。社会でも

「日本では40代で大使になるなん
て考えられないでしょう。社会でも

中国だけに集中せず、 目を世界に

もたつぷりな大使である。

「喋りすぎかな？ いつも奥さんに
怒られちゃうんですよ」とユーモア

若く、明るく、こんなにハンサムな
大使誕生の日がくるだろうか。途中、

「喋りすぎかな？ いつも奥さんに
怒られちゃうんですよ」とユーモア

関係。日本文化論をまじえた大使の

この4月、日本―メキシコの自由
貿易協定も発効し、緊密になる両国

後の課題ではないか」と語った。

だ」と指摘するとともに、「中国だけ
に集中しすぎず、世界に目をやって

経済的にさらに多様化することが今
後の課題ではないか」と語った。

最後に、日本の人口減少にともない、
多くの外国人労働者受け入れの重要

性を強調した。近隣諸国とくに中国
との関係については、アジアのもう

一つの超大国と平和的に共生するに
は、日本が標準的になることが重要

だ」と指摘するとともに、「中国だけ
に集中しすぎず、世界に目をやって

経済的にさらに多様化することが今
後の課題ではないか」と語った。

この4月、日本―メキシコの自由
貿易協定も発効し、緊密になる両国

関係。日本文化論をまじえた大使の

「総合政策フォーラム I」 講義日程表

4月19日	エジプト大使	Hisham Badr
26日	ヨルダン大使	Samir I, Naouri
5月10日	デンマーク大使	Poul Hoiness
17日	メキシコ大使	Miguel Ruiz-Cabañas
24日	オランダ大使	Egbert Jacobs
31日	ポーランド公使参事官	Jadwiga M. Rodowicz
6月7日	インド大使	Manilal Tripathi
14日	ケニア大使	Dennis N.O. Awori
21日	パキスタン大使	Kamran Niaz
28日	ノルウェー大使	Age B. Grutle
7月5日	南アフリカ共和国大使	Ben Ngubane

講義に、院生の質問も活発だった。

法学研究科に在籍する田中道子さんは、「今回の大使はともフランクで、良い意味で低い目線で話してくれたのがよかった。自国と日本を冷静に見て、どうしたら発展していけるかを身近に考えさせられました」と話した。

院生らはどう聴いたか

両教授は、すべての講義に参加することで各国の見解を比較することができ、『国際社会における日本の役割』へのより深い理解へつながると話す。そこで連続受講している院生らはなにを感じたか。03年度イー

ウィック・ゼミ

卒業でこの9月から UCL A (カリフォルニア大学ロサンゼルス校) で学ぶ予定の村上剛さんと、大学院のサドリア・ゼミで学ぶ田淵義英さんの感想を並べて紹介しよう。

(村上さん)

大使の方々のお話を聞いてみると、「日本」が特殊である、という議論

がいかに視野の狭い考えか思い知らされます。それにしても、これだけ多くの国々の大使の講演を聞く機会が一般に公開されているのに、なぜ参加者がいつも30人ていどなのか不思議でなりません。大学や自分たちの考えを本気で「国際化」する気があるのか疑いたくなります

(田淵さん)

総合政策フォーラムは、ただ大使の講演を聴いて世界を知るという場ではないらしい。そこで我々が聞く(というより見る)ことができるのは、世界の目に映る日本だ。従って我々は、各国大使の目を通して自らを省みるという、ある奇妙な内省を迫られる。

私に関する限り、世界が見る日本には希望と失望の双方が感じられた。希望とは、見事に近代化に成功しながら決してヨーロッパ化されずに自国の文化を保持したという、日本で暮らす我々にはむしろ意外なほど好意的な評価であり、失望とは、自国

の文化を継承しつつ近代化したというその特殊な歴史的位置を、日本がほとんど活用していないのではないかという批判(必ずしも非難ではない)である。こうした評価自体はそれほど新鮮なものではないかも知れない。しかし、新鮮なのはそこに込められた「熱」である。大使の発言は、時として驚くべき熱をもって日本を語る。そしてその熱が、我々の国が国際社会でどのような位置にいるのかを教えてくれる気がするのだ。鏡に映った自分を眺めて自らを知った気になるのはナルシストだけである。総合政策フォーラムは、世界の目に映った自分を見るといふ貴重な機会を我々に与えてくれる。

◇

本誌が出る7月は残り1講義となる。参加理由を明記し、教授にメールで申し込めば、総合政策学部の学生だけでなく、他学部や他大学の学生も聴講が可能だ。

(学生記者 阿部恭子)